

## 第5章 まちづくり情報帳の計画技術とその市民評価

---

## 5 - 1 本章の目的と構成

### ( 1 ) 本章の目的

第4章で明らかにしたとおり，まちづくり情報帳は，協議の場において蓄積された課題やアイデア，調査研究の結果などをまとめたもので，協議の場において最終的に絞り込まれる「決定」にいたる前の情報がおさめられるものであり，市町村マスタープランの中で，「方針」が書き込まれる「全体構想」や「地域別構想」を支える「基盤的な文書」として作成されている．本章では，このような協働型マスタープランを構成する主要な文書である「まちづくり情報帳」の計画技術の詳細を明らかにし，加えてそれに対する市民評価をアンケート調査を通じて分析することを目的とする．

### ( 2 ) まちづくり情報帳の位置づけ

ここで，まちづくり情報帳の位置づけを再度整理しておく．第4章で既述の通り，鶴岡市において，市町村マスタープランの作成を進めつつ，個別的なまちづくりの展開が取り組まれた．当初は行政からまちづくりの課題を示し，フィールドワークやデザインゲームなどの技法を取り入れた協議の場を設け，問題意識の共有，経験の蓄積，主体の掘り起こしをはかっていった．行政が示した課題は，「堰の整備」「官庁街の形成」「線引きの実施」等であるが，それぞれに個別的に協議の場が設けられ，筆者は協議の場の運営を支援すると共に，必要な調査を行った．

このような，協議の場を展開しながら生み出された計画情報を，段階的に市民・行政が共有できる情報基盤としてまとめていったものが「まちづくり情報帳」であり，「まちづくり情報帳」を「基盤的な文書」として情報共有を進めつつ，他の計画文書を加えて，市町村マスタープランが作成された．

### ( 3 ) まちづくり情報帳の特徴

以上のような段階性を前提としたため，情報の広がりや，まちづくりに関わる主体の「まちづくりの課題に対する問題意識」や「主体としての役割意識」の広がりを前提としており，まちづくり情報帳は固定的な媒体ではなく，まちづくりの広がりにあわせて展開する媒体として計画された．さらに，その展開の過程で市民とまちづくり情報帳の関わ

り方が多様化すること，つまりプランナーや行政職員がまちづくり情報帳を作成し，市民がそれを読む，という関係のみならず，完成したまちづくり情報帳を用いて自主的な学習会を開催する，あるいは経験を積んだ市民自らがまちづくり情報帳を作成する，といった，多様な関わり方を形成することが目指された．

このため，情報が蓄積されたところから段階的に発行していく方法を取り，さらに，市民側の主体が使いやすく作りやすい仕様をとった．このように，「課題に対する問題意識の広がり（以下「課題の広がり）」、「主体としての役割意識の広がり（以下「主体の広がり）」を前提とし，現実のまちづくりのプロセスにあわせた仕組みとして構築されたことがまちづくり情報帳の特徴である．

#### （４）本章の構成

以下，本章では，まず5 - 2において，以上の特徴を明らかにしつつ，まちづくり情報帳の作成技術を述べる．次いで5 - 3において，「問題意識の広がり」と「役割意識の広がり」の2点から見たまちづくり情報帳に対する市民の評価を，アンケート調査の結果から明らかにする．

## 5 - 2 まちづくり情報帳の作成技術

## ( 1 ) 全体の構成・概要

まちづくり情報帳の取り組みが始められたのは96年であるが、当初は情報収集に終始し、まちづくり情報帳の発行は98年10月より順次進められている。都市計画課に常備して窓口で配布するほか、新しいまちづくりの課題についての協議の場や様々な説明会において市民に手渡されている。市広報などのPRにより窓口まで取りに来る市民も多く、これまで延べ約600冊が発行されている。また、既述の通り、2001年6月に発行された市町村マスタープランの計画文書の一部として位置づけられて発行されている。市町村マスタープランはバインダー形式で、作成された文書が順次加除されるという形をとっている。まちづくり情報帳の体裁もこの形に準じており、段階的な発行に対応したものとなっている。新たに増えた文書は郵送により市民の手元に届けられることになっており、市の名簿には216名が登録され、メンテナンスの対象となっている。

全体は、「まちづくり情報編」「まちづくり知恵袋編」「まちづくり実践編」「まちづくりニュース編」から構成されている(図5-2-1)。「まちづくり情報編」は「地区について様々な視点からの調査・分析したもの」、「まちづくり知恵袋編」は「イベントの仕掛け方、ワークショップ

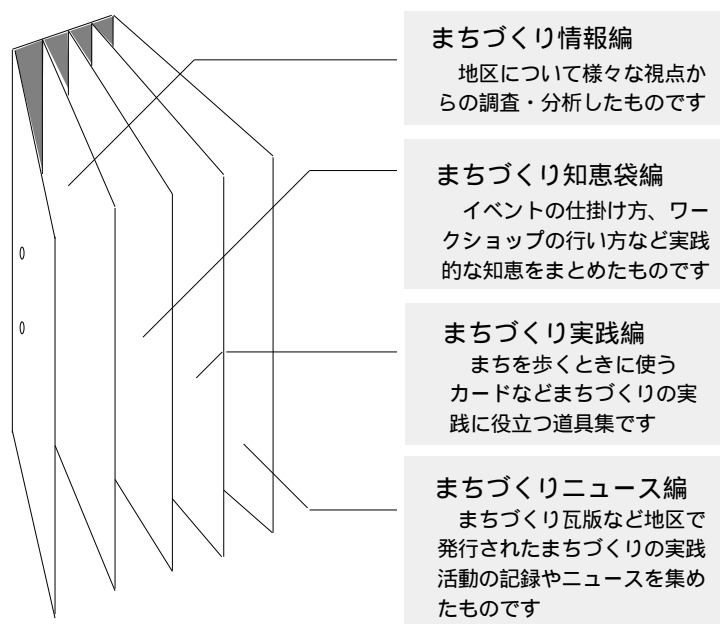


図5-2-1 まちづくり情報帳の構成

プの行い方など実践的な知恵をまとめたもの」,「まちづくり実践編」は「まちを歩くときに使うカードなどまちづくりの実践に役立つ道具集」,「まちづくりニュース編」は「まちづくり瓦版など地区で発行されたまちづくりの実践活動の記録やニュースを集めたもの」である。まちづくりの取り組みの中で得られた情報が主におさめられているのは「まちづくり情報編」であり,以下では「まちづくり情報編」について報告する。

### (2) これまで発行されたまちづくり情報帳の内容

これまで発行されたページの一覧,それぞれの,タイトル,ページ数,概要,論旨,発行時期,まちづくり情報帳の内容のリソースとなった議論や調査を見る(表5-2-1)。98年に最初のまちづくり情報帳が発行され,以降調査や協議の場がまとまるたびに段階的に発行されている。扱うテーマは98年3月発行のもの(都市の成り立ちを探る,山の景観を楽しむ,鶴岡らしい小空間を楽しむ,気持ちのよいまちをつくる緑と水,大道堰の歴史,様々な場所をつなぐ大道堰,大道堰の使われ方今昔など)は景観形成に関するものが多く,後に98年10月,00年3月,02年2月と発行され,中心市街地活性化や商業振興(都市の拡大を探る,人口のバランスを考える,シビックゾーンのまちづくりを考える,都市のにぎわいを楽しむ,多様な居住の可能性を探る,まちなか観光の可能性,中心市街地の空間を読む,中心市街地の空間の移り変わり,中心市街地をデザインする)といったテーマのものが増える。このテーマの変遷は,第4章で整理したとおり,鶴岡市における市町村マスタープランの作成と展開のプロセスにあわせたものである。

### (3) 紙面の構成

各タイトルは2~4ページで完結する形をとった。(図5-2-2)一般的な市民が一息で読め,かつ市民側の主体が簡易に作成できる,ということを重視した分量である。また,多くの情報を入れるために図版を多用した。情報を羅列するものではなく「解釈」をまとめたものであり,説明的になることを避け,論文調,問題提起調とした(表5-2-1「論旨」欄参照)。必然的に作成者の主張が盛り込まれるため,ページ右下に作成者の署名欄を設けた。現在は全てが専門家と市役所により作成されているが,当初より様々な主体が作成可能であることが市民に対して説明されている。

表5-2-1 まちづくり情報帳の一覧

no.	タイトル	ページ数	概要	論旨	発行時期	情報帳作成のための議論や調査	
						概要	実施年
1	都市の成り立ちを探る	4	鶴岡の都市設計手法を領域・基本軸・基本単位の三つに分けて分析し、以後の都市形成を江戸時代、明治時代、現代に分けて分析した。	中心商業地の衰退と郊外化、都市の南北軸の弱体化と東西軸の強化、城郭周辺のシンボル性が指摘される。	98年10月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた情報を総合した。	96年
2	山の景観を楽しむ	2	鶴岡のまちの景観を特徴づけている山の景観を、山なみ景観と、沿道景観に分けて紹介した。	山の景観は、城下町の街路が持つダイナミックな空間の仕掛けであり、鶴岡らしさの象徴である。それらを尊重したまちづくりが求められる。	98年3月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた情報を総合した。	96年
3	鶴岡らしい小空間を楽しむ	2	旧城下域に点在する、城下町時代の街路、木戸口、橋などの小空間の魅力をまとめた。	鶴岡の魅力は、山の壮大な景観と、城下町の頃から残る小空間の混在にある。	98年3月	大学研究室で自主研究として行った分析と、「第3学区のまちづくりを考える会」で得られた情報を総合した。	97年
4	自動車交通について考える	2	中心市街地（第3学区）の一部を対象にして行われた自動車交通量調査から、地区の交通特性をまとめた。	城下町時代の街路の形を多く残す歴史的市街地と自動車交通の共存が課題となっている。	98年3月	地区の交通量調査で得られた情報をまとめた。	96年
5	まちの危険な場所	2	地図を元に、まちの危険な場所についてまとめた。	危険だから近づかないという姿勢では本質的な解決にはならず、個別の原因を読み解き、考えていくことが必要である。	98年3月	「生活環境マップ/第三学区コミュニティ協議会」や「こどもきけんかしょマップ/鶴岡市」、「大道堰を歩く会 <sup>1)</sup> 」などで得られた情報を総合した。	97年
6	気持ちのよいまちをつくる緑と水	2	オープンスペース、まとまりのある緑、庭木の緑、河川・水路沿いの緑の4つに分けて、まちの緑と水についてまとめた。	町中には多種多様な緑が豊富に見られるが、十分に活かされていない。どう活かしていくかが今後の課題である。	98年3月	「第3学区のまちづくりを考える会」や「大道堰を歩く会 <sup>1)</sup> 」などで得られた住民の声の情報を総合した。	97年
7	大道堰の歴史	2	市内を北東に流れる灌漑用水路である大道堰の沿革・歴史について紹介した。	急激な宅地化が進み灌漑用水路としての役割が少なくなった。水質も徐々に悪化し、生き物が棲みつかない環境となっている。	98年3月	「大道堰を歩く会 <sup>1)</sup> 」で得られた情報と、大学研究室の独自のインタビュー調査と資料調査の結果とあわせてまとめた。	97年
8	様々な場所をつなぐ大道堰	2	現在の大道堰の魅力と問題点をまとめた。	農業用水路から住宅地を流れる堰へとその姿は大きく変わったが、沿線には魅力的なオープンスペースが見られ、堰はこれらをつなげる可能性を持っている。	98年3月	1) 第三学区のまちづくりを考える会の活動として開催された。住民約30名(全て公募・自由参加)が参加し、学区内を流れる大道堰の課題、活用といった課題についてまち歩きなどを組行なって論じた。	
9	大道堰の使われ方今昔	2	昔から現在に至るまでの堰の使われ方をまとめた。	生活スタイルの変化により、堰の持っていた生活に密着した美しさが失われつつある。新たな生活スタイルと結びつけた堰の役割を考える必要がある。	98年3月		

表5 - 2 - 1 まちづくり情報帳の一覧

no.	タイトル	ページ数	概要	論旨	発行時期	情報帳作成のための議論や調査	
						概要	実施年
10	都市の拡大を探る	2	都市全体のバランスを見るために、都市の拡大過程を分析し、今後の課題をまとめた。	今後人口が増加する見込みはなく、市街地周辺を開発していくより旧市街地内で計画的に開発を進め、都市の規模を維持していく必要がある。	98年10月	大学研究室で自主研究として行った分析から得られた情報をまとめた。	98年
11	人口のバランスを考える	2	人口の空洞化、高齢化の現状を地域毎に把握し、これによって生じる問題点をまとめた。	同心円状に人口減少、世帯数の減少、高齢化の地域が広がり、地域間の人口のバランスに偏りが生まれ、生活の重心を変えている。	98年10月		
12	シビックゾーンのまちづくりを考える / シビックゾーンとは？	2	官庁街地区「シビックゾーン」のまちづくりの問題、居住の現状、都市計画の中での位置づけを整理、紹介した。	中心市街地の各地区の「楔」の位置にあたるシビックゾーンが、各地区を連続性をもってどうつなげるか、その風格をどのように活かすかが課題である。	00年3月	大学研究室で行った分析と、99年に開催された「シビックゾーンのまちづくりワークショップ」で得られた情報を総合した。	99年
13	シビックゾーンのまちづくりを考える / シビックゾーンのあゆみ	2	シビックゾーンの歴史を江戸期、大正～昭和初期、昭和後期、現在の4段階に分けて紹介した。	安定した地盤であり一貫して行政機能がおかれてきた。古い官庁施設の意向と現在の官庁施設が同居しており「歴史の重層性」が感じられる地区である。	00年3月		
14	シビックゾーンのまちづくりを考える / シビックゾーンのこれから	6	「シビックゾーンのまちづくりワークショップ」で議論した、地区全体の整備イメージ、二つの通りを中心とした将来イメージを紹介した。	千歳橋筋は参加者のイメージがまとまらず、食い違う意見も多くあった。みゆき通りは旧大手道という歴史的な背景がてがかりとなりイメージが共有された。	00年3月		
15	シビックゾーンのまちづくりを考える / 今後のまちづくり	2	シビックゾーンの今後の整備について、ワークショップでの議論を総括した。	シビックゾーンのイメージを作ることは簡単ではないが、共通認識も少なくない。継続的に市民自身で議論していくことが重要である。	00年3月	99年に開催された「シビックゾーンのまちづくりワークショップ」で得られた情報をまとめた。	99年
16	都市のにぎわいを楽しむ	2	中心市街地で行われている市「ナイトバザール」の実態を明らかにし、活性化の視点からどのような可能性があるかをまとめた。	画一的でない雑然さがナイトバザールの強みになっている。「商店街としての」ではなく「鶴岡のナイトバザール」として展開することが望まれる。	02年2月		
17	あるいて楽しむ都市空間	2	実験的に車両通行止めにして行われた「ナイトバザール」時の空間の使われ方を分析した。	車両通行止めにより、人々がまちを自由に歩いて買い物を楽しむことができ、車道を広く使った店舗、表現活動が出来るようになった。	02年2月	大学研究室で自主研究として行ったナイトバザール出店者へのアンケート調査、来街者へのインタビュー調査の結果をまとめた。	01年

表5 - 2 - 1 まちづくり情報帳の一覧

no.	タイトル	ページ数	概要	論旨	発行時期	情報帳作成のための議論や調査	
						概要	実施年
18	道路交通システムの現状	2	中心市街地の道路交通システムの現状を明らかにし、今後のありかたについて考えた。	現状では歩行回遊を楽しむことが出来ない。市民の意識を変えつつ、ビジョンと戦略に基づいて道路交通システム形成を行う必要がある。	02年2月	大学研究室で行った、駐車場の実態調査、歩行回遊の実態調査の結果をまとめた。	00年
19	駐車回遊型の交通社会実験	4	交通社会実験の結果を、パークアンドバスライドシステムの利用、商業活動への影響、市民意識の変化の3点から分析した。	交通混雑もなく、滞在時間の増加、回遊性の向上、市民意識の向上が実証された。今後は地域で一体となって実験を継続していく必要がある。	02年2月	大学研究室で行った、交通社会実験の結果の分析をまとめた。	01年
20	多様な居住の可能性を探る <sup>1</sup>	2	中心市街地再生の課題となる定住人口の回復について、住民移動のデータから実態と可能性についてまとめた。	中心市街地に生涯定住するというニーズは多く見られないが、転勤者向け住宅ニーズ、一戸建て購入前ニーズ、高齢者世帯ニーズが見いだされた。	02年2月	「元気居住都心構想ワークショップ <sup>2)</sup> 」で得られた情報と、大学研究室で行った都心居住実態調査の結果の分析をまとめた。	01年
21	多様な居住の可能性を探る <sup>2</sup>	2	東京在住鶴岡出身者の中心市街地へのUターン居住の可能性についてまとめた。	短中期的には鶴岡での居住を希望する意向が多く、具体的なスタイル、必要な機能・サービスが明らかになった。	02年2月	<sup>2)</sup> 市民約50名(全て公募・自由参加)が参加し、5回開催された。中心市街地における高齢者居住の可能性について議論した。	
22	まちなか観光の可能性	2	中心市街地活性化の一つの方向性として取り組まれている「まちなか観光」の考え方と、実験的に取り組まれた「つるおか街かど文学館」の活動を紹介した。	市民運営による小空間は、単なる施設ではなく、新しいコミュニケーションの場となる。今後も、市民活動が常に生み出される環境づくりが大切になる。	02年2月	「歩いて暮らせるまちづくりワークショップ」で得られた情報と、「つるおか街かど文学館」の活動をまとめた。	00年～01年
23	中心市街地の空間を読む	2	城下町時代の複雑な道路空間が残る中心市街地で、どのように都市空間が変化してきたかをまとめた。	鶴岡には複雑な道路空間が残されており、このことは思いがけない面白い空間が生まれる可能性につながる。	02年2月	大学研究室で行った分析と、住民インタビュー調査で得られた情報を総合した。	99年
24	中心市街地の空間の移り変わり	2	戦後の中心商店街の空間構成の変遷の実態をまとめた。	個人によるばらばらな空間更新は、街全体としての魅力的な商業空間形成につながっていない。個人の建て替えと全体のビジョンが連動するまちづくりのシナリオが必要である。	02年2月		
25	中心市街地をデザインする	2	商業者が参加した「立体建替えデザインゲーム」の結果と、このゲームを通して見えてきた中心市街地の将来の姿をまとめた。	現段階では夢に過ぎないアイデアだが、今後個別の建替えにあわせてアイデアを少しずつ実現していくことにより、まち全体で素晴らしい空間を生み出すことができる。	02年2月	「立体建替えデザインゲーム <sup>3)</sup> 」で得られた情報をまとめた。  <sup>3)</sup> 商店主約30名が参加し、13回開催された。模型を用いて建替えを体験するゲームを通じて、まちの将来像を議論した。	99年





図5 - 2 - 2 まちづくり情報帳の紙面の構成 (no.2 山の景観を楽しむ の例 / 左ページ)

見晴らしのいい場所からの雄大な山なみの景観

内川に架かる橋からは遠く北方の鳥海山、南方に折り重なるように金峰山、母狩山の三峰を望むことができます。広々とした内川を前にした山なみの景観は鶴岡を象徴する景観と言えます。この他にも山なみの景観を楽しめるオープンスペースとしては、青龍寺に架かる橋、鶴岡公園、学校の校庭などが挙げられます。



三雪橋と金峰・母狩山

街路の沿道の建物と一体となった山の景観

山に向かって真っ直ぐに伸びる街路では、沿道の建物と一体となった山の景観を楽しむことができます。山の見え隠れを楽しめるカーブのある街路



板場の続く通りと母狩山

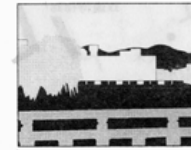
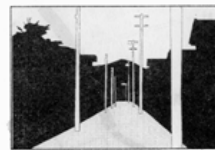
屈曲のある街路では山の見え隠れを楽しむことができます。右の3枚の写真は新海町の外濠沿いの道を南へ向かって歩く時に展開される風景です。道がゆるやかにカーブしているため、歩を進めるにつれ、沿道の建物に隠れていた金峰山が道の正面に現れてきます。このような山の見え隠れは鶴岡の多くの街路で体験することができます。この山の見え隠れは、元来、歩行者のためにつくられた城下町の街路が持つダイナミックな空間の仕掛けとも言え、鶴岡らしさの象徴と言えます。



景観を阻害するもの

こういった鶴岡らしい山の景観も、都市化の波によって影響を受けつつあります。沿道の電柱群や大きな建物が、山への風景を遮り景観を損なっている場所が見られます。かつて、金峰山、母狩山、鳥海山の三峰への眺望を楽しむことができた三雪橋では、南方の大きな建物によって、金峰山、母狩山の景観が阻害されています。また、御濠端からの鳥海山の景観は新しく

できた高校の建物によって今は見ることはできません。山の遠景と街路の近景が一体となって産み出され、岡らしい景観を大切にしたいまちづくりが求められ



[早稲田大学佐藤研]

■参考図書 ・造景No.12「都市の風景計画」  
近世城下町の都市デザインの解説が、現代の地方城下町のまちづくりにどう活かされるのか、鶴岡市を中心事例として分析しています。

1998年3月

図5-2-2 まちづくり情報帳の紙面の構成 (no.2 山の景観を楽しむ の例 / 右ページ)

### 5 - 3 市民の評価

#### ( 1 ) 評価の概要

5 - 1で述べたとおり，まちづくり情報帳は「課題の広がり」と「主体の広がり」を前提としていることが特徴であり，この点についてまちづくり情報帳を所持する市民の評価を調査した．具体的には，アンケートにより市民の「まちづくりに取り組む姿勢」を類型化し，まちづくり情報帳で扱う課題の広がりがそれぞれの問題意識と合致しているかという点（以下問題意識の一致），各人が主体としてどのような役割意識でまちづくり情報帳と関わっているかという点（以下役割意識の一致）の2点について分析を行った．

#### ( 2 ) 調査の方法

調査の対象としたのは，まちづくり情報帳を配布した先として鶴岡市都市計画課が把握している216名である．調査票は，鶴岡市都市計画課の名義で，no.16～25のまちづくり情報帳の送付にあわせて配布した．2002年3月11日に郵送で配布し，郵送・FAXによる回収，窓口における直接回収を行った．85通を回収し，うち有効回答数は69通，回収率は31.9%であった．回答者の年齢は61歳以上が32名，41歳～60歳までが32名と同数であわせて大半を占める．回答者の性別は男性38名，女性20名，残りは不明である（図5 - 3 - 1）．

#### ( 3 ) 分析のフレーム

分析にあたって，まず個人がまちづくりに取り組む姿勢を5タイプに類型した（図5 - 3 - 2）．まちづくりは多様な姿勢の人物が関係し，関わり方や評価はそこから形成されるからである．

類型化は，「問題意識」と「役割意識」の軸により行った．「役割

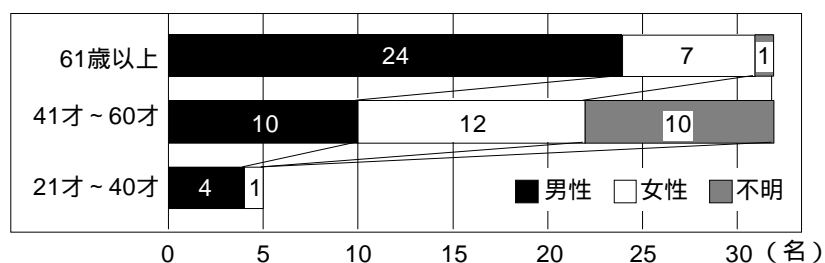


図5 - 3 - 1 アンケート回答者の年齢・性別

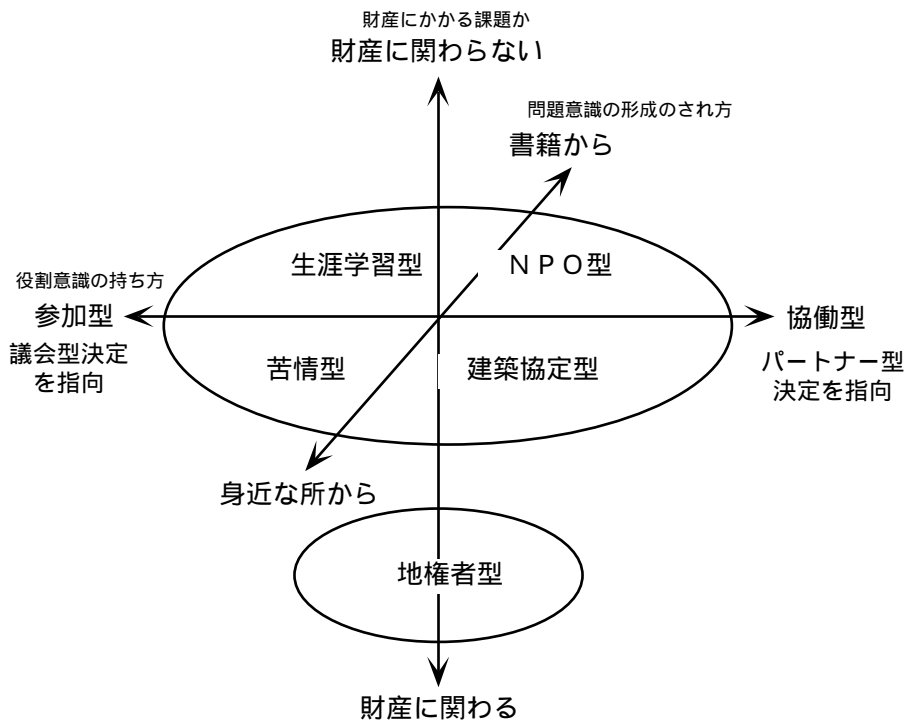


図5 - 3 - 2 まちづくりに取り組む姿勢の類型

意識」については、協議の場などにおいて「議会型決定」を指向する、行政に対して意見を述べたいタイプ（参加型）と、協議の場などにおいて「パートナー型決定」を指向する、自らがまちづくりを実践するタイプ（協働型）の二つを両端におく「役割意識の持ち方」の軸を設定する。まちづくり情報帳に対しては前者は例えば読者としての、後者は制作者としての関わり方が想定される。「問題意識」の軸については、教育や書籍など外部の情報からまちづくりの問題意識を形成したタイプと、身近な環境の不備から問題意識を形成したタイプの二つを両端におく「問題意識の形成のされかた」の軸を設定する。まちづくり情報帳に対しては前者は例えば城下町の歴史などをまとめた内容を、後者は例えば地図上に苦情をまとめた内容を好むことが想定される。

一方で、この2軸はまちづくりを公益的な立場から取り組むことを前提としているが、自らの財産がまちづくりの課題と直接関係する場合、私益的な立場も持ちうる。この場合2軸に加えて、「財産にかかわるか」がもう一つの軸として示される。財産にかかわる場合は「参加」や「協働」といった公益的立場は取りにくくなり、かつ問題意識よりも財産に関する意識が優先することが起こりうる。そのため、先に示した

2軸は、「財産に関わらない」というタイプに適用される。

以上まとめると、個人がまちづくりに取り組む姿勢が類型化される。タイプは都市計画道路の拡幅で存亡の危機に立たされている店主（以下「地権者型」）、タイプは生涯学習としてまちづくりに取り組む市民（以下「生涯学習型」）、タイプは苦情を陳情する町内会長（以下「苦情型」）、タイプは住環境向上のために行政と相談しながら建築協定締結に取り組む市民（以下「建築協定型」）、タイプは専門的な能力を持つまちづくりNPOのスタッフ（以下「NPO型」）などが例示される。

一人の人物が局面に応じてこれらの姿勢を使い分けることは十分にあり、優れたまちづくりのリーダーであるほど、これらの姿勢を多く併せ持っているとも言える。したがって、5つのタイプの組み合わせによって類型化する方がより正確であるが、サンプル数を考慮して、アンケートに「a.まちづくりは、不動産等のあなたの個人的な資産・財産に深く関わる問題ですか」「b.あなたがまちづくりに関わることになった動機は何ですか」「c.まちづくりにおいてあなたが考えていらっしゃるご自身と行政との関係はどのようなものですか」の質問を設け、その回答により、市民を5つのタイプに区別した（図5-3-3）。

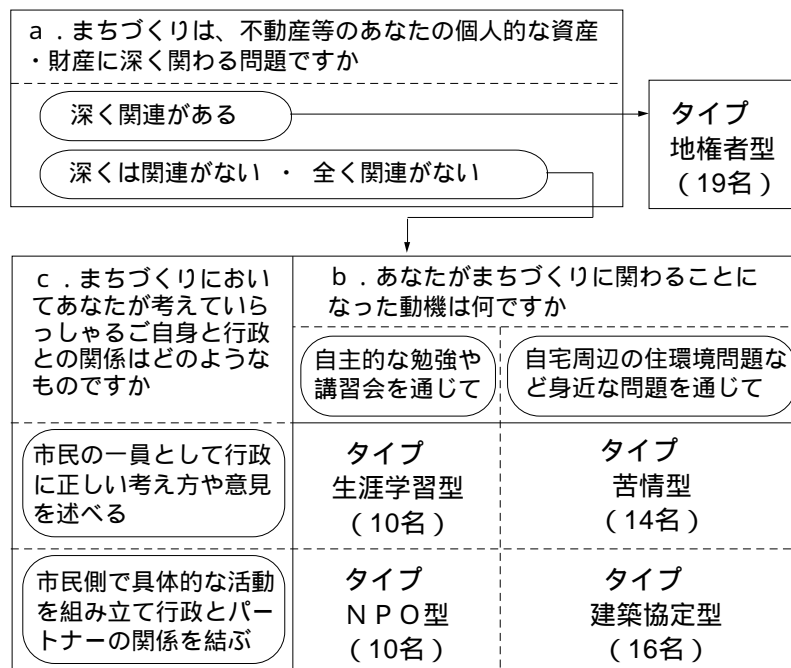


図5-3-3 まちづくりに取り組む姿勢のタイプの区別方法

(4) 各タイプ毎の評価1：問題意識の一致

まず、問題意識の一致を見る。まちづくり情報帳の内容について、「e. 市民の意見や意向がまとまっている（以下「市民意向）」」「f. 専門的な情報がまとまっている（以下「専門性）」」「g. 具体的に役に立つ情報がまとまっている（以下「具体性）」」「h. 生活実感に根ざしたこまごまとした情報がまとまっている（以下「生活実感）」」の4つの評価項目を示し、それぞれ「まとまっていない（得点1）」「まとまっている（得点2）」「大変よくまとまっている（得点3）」の3段階の評価を得た。それらの評価の各タイプ毎の評点の平均値と全体の平均値を分析した（図5-3-4）。

全体平均を見ると、4項目の評価にあまりばらつきが無いが、「専門性」「具体性」がやや高い評点となっている。まちづくり情報帳が専門的な「解釈」をまとめたものであり、市民の意見を広くまとめたものを志向したものではないことが反映されたと考えられる。タイプ毎に見ると、地権者型と生涯学習型はほぼ全体平均と重なっており、生涯学習型がやや全体的に高い評点となっている。建築協定型は、全項目において

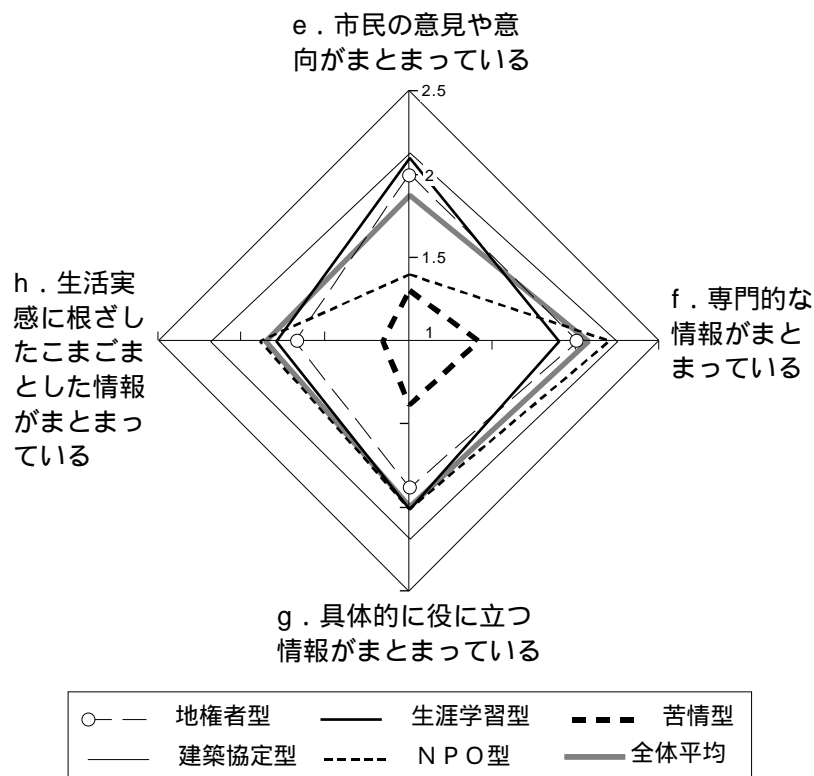


図5-3-4 まちづくりに取り組む姿勢の類型毎の問題意識の一致の分析

最も高い評点である。苦情型は評点が極端に低く、特に項目「市民意向」「生活実感」の評点が低い。その理由としては、まちづくり情報帳が個別的な苦情や、市民の声を広く浅く取り上げるような内容となっていないためであると考えられる。NPO型は、「市民意向」「専門性」「生活実感」の項目が全体平均に近いのに対し、「市民意向」の評点が低い。その理由は様々考えられるが、肯定的に見ればそもそもNPO型が「市民意向」の情報より「具体性」の情報を欲していること、否定的に見ればまちづくり情報帳には外部の専門家の主張が多く盛り込まれているため「高い専門性は有するが、市民の意見をまとめたわけではない」という反発と考えられる。

#### (5) 各タイプ毎の評価1：役割意識の一致

次いで、役割意識の一致を見る。「i.情報帳をどのように読んでるか(以下「読む」)」「j.情報帳を使ったまちづくりの学習会等へ参加しことがあるか(以下「学習会参加」)」「k. 情報帳を使ったまちづくりの学習会等を企画したことがあるか(以下「学習会企画」)」「l. 情報帳を自らつくることを考えたことがあるか?(以下「情報帳作成」)」の4項目を示し、各項目への関わり方の度合いを選択肢を挙げて調査した(図5-3-5)。

「読む」に対しては、全体で40%近くが「自宅でじっくりと読む」以上の関わり方を答えたのに対し、苦情型と地権者型の多くが「ぱらぱらと見る」程度であることが特筆される。「学習会参加」と「読む」への評点は似ており、比率こそ異なれ、タイプ毎の評点の相対的な関係は両項目で変わらない。しかし地権者型の「学習会企画」への関わり方を見ると、「実際に参加したことがある」という関わり方が増大している。「手元に届いた時には読まないが、学習会には参加する」という関わり方が読みとれ、その理由としては、地権者型の抱える危機感が対人的なコミュニケーションを必要としていることが考えられる。

「学習会企画」「情報帳作成」は「読む」「学習会企画」がどちらかといえば受動的な関わり方であるのに対し、能動的な関わり方である。そのため「考えたことがない」という関わり方が全体として増大している。しかし、NPO型を見ると、「学習会企画」「情報帳作成」ともに、60%以上が「企画してみたい、制作してみたい」以上の関わり方を答えている。次いで能動的なのは建築協定型、地権者型であるが、「情報帳作

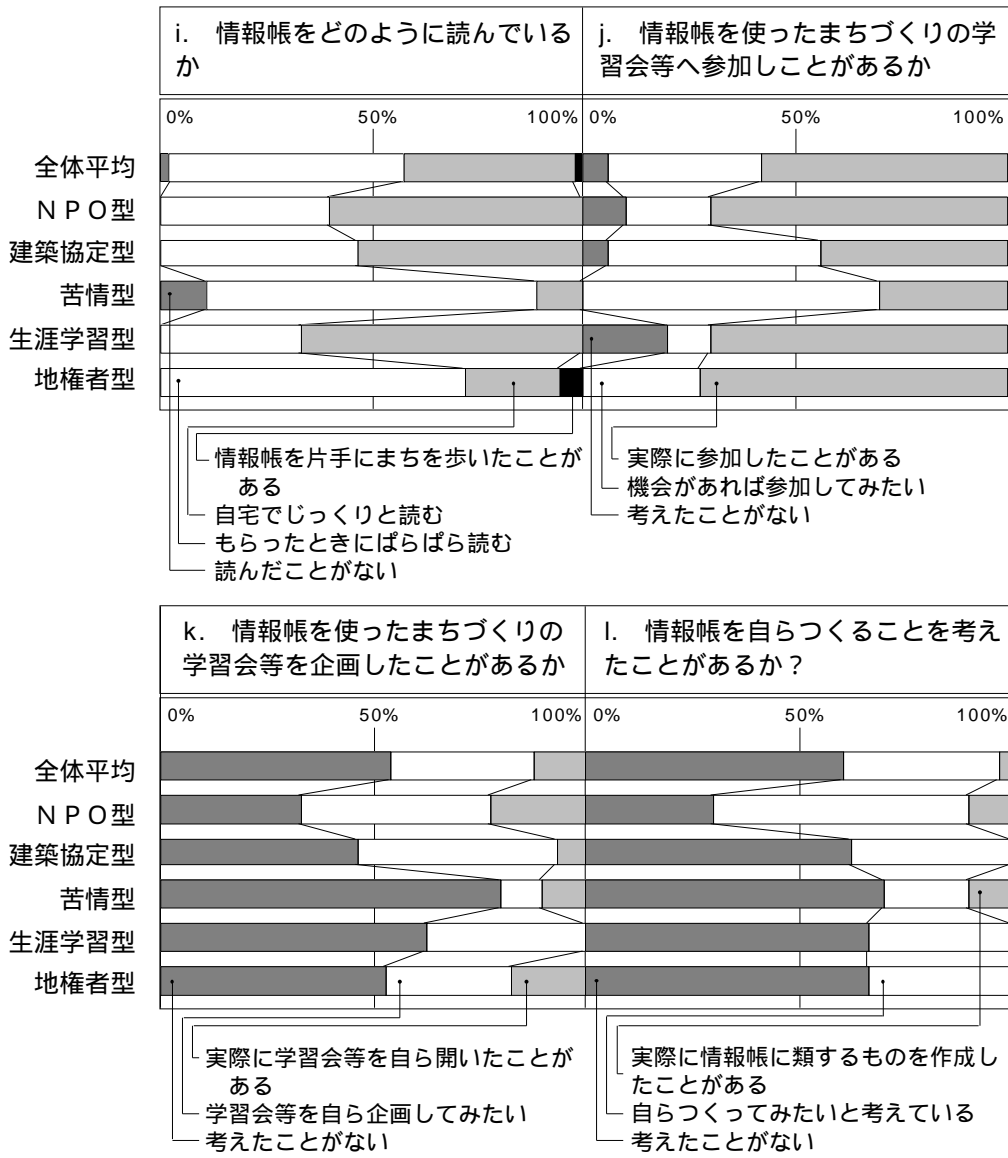


図5 - 3 - 5 まちづくりに取り組む姿勢の類型毎の役割意識の一致の分析

成」についてはあまり能動的ではない。

苦情型，生涯学習型は「学習会企画」「情報帳作成」ともに能動的ではない。苦情型が全項目を通じて能動的ではないのに対し，生涯学習型は「読む」「学習会企画」で示された関わり方と対照的な結果となった。「学習は好きだが，自らが学習の場を仕掛ける側にはならない」という関わり方と言える。

以上，まちづくり情報帳に対する各タイプ毎の評価をまとめる。まず，苦情型については，問題意識とまちづくり情報帳でまとめられた



課題がずれており，内容も殆ど読まれておらず役割意識そのものが形成されていない．地権者型と生涯学習型の問題意識と課題はあまりずれておらず，「学習会を企画する」「まちづくり情報帳を制作する」といった関わり方は地権者型に少し見られるものの，どちらかというところ「学習会に参加する」関わり方が多い．生涯学習型はまちづくり情報帳をじっくりと読むが，地権者型は読まず，地権者型に対して学習会などの施策を充実させることが，まちづくり情報帳の有効性を高めることにつながる．建築協定型とNPO型は全体的に能動的な役割意識を持っており，NPO型が特にその傾向が強い．問題意識と課題のずれを見ると，NPO型は多少ずれが見られるが，建築協定型は最もずれが少ない．

---

## 5 - 4 まとめ

本章では、「まちづくり情報帳」の作成の計画技術を報告し、市民の評価を調査した。

### まちづくり情報帳の計画技術

まちづくり情報帳の特徴は「課題の広がり」と「主体の広がり」を前提としたところにあり、具体的な技術として、「課題の広がり」に対応した情報が蓄積された課題からの段階的な発行、「主体の広がり」に対応した市民側の主体が使いやすく作りやすい仕様、を明らかにした。

### まちづくり情報帳の市民評価

評価については、市民を「問題意識」「役割意識」「財産に関わる問題かどうか」の3軸より、「生涯学習型」「苦情型」「NPO型」「建築協定型」「地権者型」に類型化し、それぞれの「問題意識」「役割意識」と情報帳の「課題の広がり」「主体の広がり」の合致を調査した。評価を見ると、5タイプのそれぞれの傾向が明らかになった。問題意識とうまく一致し、読み手層となっているのは生涯学習型、建築協定型、NPO型であり、学習会が組み合わせられることによってそこに地権者型が加わる。これらのうち建築協定型、NPO型はまちづくり情報帳の企画、制作側に回りたいという積極的な役割意識も持っている。苦情型の問題意識には対応出来ておらず読まれてもいない。

まちづくり情報帳は鶴岡市の市町村マスタープランにおいて、全体構想、地域別構想などを支える「基盤的な文書」として作成されている。市民評価を通じて、この「基盤的な文書」に対して市民が多様に問題意識を形成し、多様な「役割意識」を形成していることが明らかとなった。実際のまちづくりの現場では、建築協定型、NPO型の人材を中心に据えて、苦情型の意向をうまく受けとめつつ、生涯学習を通じて人材を育成し、地権者の協力を引き出す、といった形で、5タイプの市民の役割を組み合わせることが求められる。今後はまちづくり情報帳を基盤として、市民の中に新たな関係性を創出することが望まれる。

